

靖国神社遺児参拝 戦後と戦前の連続⑦

熊本県の遺児参拝体験と海外への日本語教育に翔けたおふたりの人生

田端克敏・道子さんに聞く

松岡 勲

はじめに

今年の一月、熊本県からの靖国遺児参拝を体験されたご夫婦を訪ねた。現在、東京にお住まいの田端克敏、道子さんだ。おふたりは一九四二年に熊本県人吉市に生まれ、現在八二歳。お二人は高校まで同窓生の幼なじみ。高校卒業後、克敏さんは東京、道子さんは福岡の大学に進学し、その後、ふたりは結婚。三人のお子さんもそれぞれ独立されている。

東京に着き、新宿で京王線に乗り換え、多摩センター駅で、克敏さんの迎えを受ける。これまで道子さんについてはブログやフェースブックに書かれた絵画や文章を読んでいたが、克敏さんについては書道をされるというところがいしか知らなかった。克敏さんは恰幅がよく、温厚で包容力ある方だとの印象を受けた。ご自宅は戦後、丘陵地帯に造成した多摩ニュータウンのなかにあった。

(関西で言えば千里ニュータウンに相当する) 克敏さんの話では団地の居住者は高齢化が進んでい



ふたり展で

ることだった。

これまで会いたいと思いついて描いていた道子さんとお目にかかった。しつかりと人生を歩み、絵の制作を続けてこられた感性の豊かな方だと感じた。一九八三年からふたり展を始められ、昨年で二二回になる。道子さんは絵を、克敏さんは書を発表されてきた。

「私は水彩画とパソコン画、夫は書に精進しながらの晴耕雨読の日々を東京多摩センターで過ごしています。」

(道子さんのフェースブックより)

疲れ果てた靖国神社遺児参拝

克敏さん、道子さんは中学生一年生(一九五四/昭和二九年)の時に靖国神社遺児参拝をされていますが、覚えておられることはどんなことですか。その当時、参拝についてのどのようなことを感じられましたか。今から考えると、靖国遺児参拝をどう思わ

れますか。

(克敏さん)

戦争で父を亡くした遺児たちが靖国神社に参拝するということが、ある暑い夏の日駅頭に集められた。乗せられたのは臨時列車、当時の三等座席(板の席)に六人が向かい合いその真ん中にさらに板を渡して昼夜を過ごした。なにしろほかの列車のダイヤを縫って走るのだから昼間は走っているよりも止まっているほうが長い。東京駅に着いたのは一週間ほど後。列車ダイヤの間を縫って走る臨時列車だから、名もない駅で止まり止まり、特に日中は各駅停車の感があった。子どもたちにとって大変過酷な旅だった。休む間もなく靖国神社参拝となった。雑魚寝の宿で二泊ほどしてまた帰りの列車へのトンボ帰りである。よくぞ皆体調も壊さず帰れたものと思う。

靖国神社では大鳥居の前で集合写真を撮ったということしか思い出せない。(それも後で写真をもたらしたから覚えていたということだろう。皆疲れ切って生気がない)

母節子は、父優が遺した「靖国で会おう」というひとことがあったればこそ戦後の苦境を耐え凌ぐことができたと思われる。晩年上京してからは毎秋の靖国神社への参拝を欠かさなかった。しかし少年時代以降の克敏には、海中に没した父の遺骨は誰だったのかという疑念が膨れるばかりだった。私は靖国神社参拝を怠らない母とはついに一度も同行しないまままで終えた。

(道子さん)

克敏同様、ただただ疲れた、という印象以外何も覚えていません。靖国神社の境内に立つてもここに父が眠っているとは全く感じませんでした。ただ、東京というところに行くことができると思うと出発時は心ウキウキでした。しかし大変な強行軍で身も心も疲れ果て、帰ってきたときには体重が二キログラム以上も減っていました。

靖国神社の参拝については、克敏の母のように大きな心の支えになったのですから一概にいい、悪いと決めつけることもできないと思います。

二〇一〇年六月、松岡の中学三年時(一九五八/昭和三三年)の靖国神社遺児参拝文集『靖国の父を訪ねて 第十二集』が本棚に埋もれているのを再発見した。当時、インターネットを検索し、一九五〇年代の熊本県での靖国神社遺児参拝についての体験をブログに掲載していたのが道子さんだった。(「新つれづれ日記」子ども時代の靖国神社参拝)重複するところが一部あるが引用する。なお「熊本日日新聞」(二〇二〇年八月一〇日)には熊本県の靖国神社遺児参拝の記事が掲載されている。第一回目の一九五三年三月は小学校を卒業したばかりの二二一人、第二回目が同年八月に小中学生の遺児八七一人だった。

「子ども時代の靖国神社参拝」(道子さん)

私と夫は共に戦争遺児であり、二人の母は共に戦争未亡人である。

私たちが中学一年生（一九五四年）の夏休みに遺児たちを靖国神社に連れて行き参拝させるという企画があった。わが家は私と弟、夫の家は本人と、そのころ市役所に勤めていた母が付き添い員で参加した。

この企画は国が行ったのか、遺族会の計画だったのか、どこからお金が出たのか、今となってはわからない。お金はほとんどいらず、確かお米だけ持参だった記憶がある。しかし、リュックや水筒、靴や洋服の準備は母子家庭には苦しいものだったに違いない。

とにかく子どもたちは「東京旅行」ということで大喜びであった。熊本県から集まった何百人という遺児たちを特別仕立ての蒸気機関車で東京に運ぶのである。

戦争遺児集団を列車で東京に運ぶ異様な風景である。その頃の汽車はまことにスピードが遅く、一週間ぐらい乗って東京にたどり着いた記憶がある。それも汽車はトンネルのたびの黒煙もうもろ、固い座椅子の揺れは激しく、空調もない時代、その暑いこと。夜は通路に新聞紙を敷きつめ、そこにごろ寝した。汽車酔いで吐く子、頭痛の子、下痢の子続出。みな一〇歳前後の子供たち。東京にたどり着いた時は、顔は煤だらけ、憔悴しきって歩くのもやつの状態であった。

めったに汽車などに乗れなかった遺児たちは、「東京に行ける」という喜びで参加したのであったが、この旅行はただただ疲れ切ったという思い出しかない。東京見物の思い出が何もないから、強硬スケジュールで、目的を果たせば帰るだけの旅で、楽しい思い出は何もない。

父の顔を全く覚えていない私たちは、大人たちの指示で靖国神社に深々と頭を下げたのであるが、なんの感慨もなかった。その時靖国神社で撮った記念写真があるが。みんな痩せてしまい、やつれ果て眉をしかめて写っている。

（二〇一二年二月）

戦争に翻弄された家族

（一）克敏さん、道子さんのお父様の生年月はいつですか。その当時、道子さんのお父様は満州で軍隊に現地召集されたことですが、また克敏さんのお父様はレイテ島での特攻で戦死されたことですが、おふたりのお父様の戦死までの経緯について、お教えてください。

（克敏さん）

克敏の父田端まぎの優は一九二二（明治四五年）二月に熊本県下益郡大字杉合村で生まれた。

優は飛行学校の教官として各地を転任したが、福岡・明野飛行場勤務のころより栄養失調からなる弱視（夜盲症）を患い、新聞の大きな活字も読めず毎朝母が代読したという。そんな状況の中でも優は長年の経験と勘だけで飛行訓練の任を全うした。

各地の飛行場で数か月の飛行訓練を受けた教え子たちが次々に特攻隊員として死地に飛び立っていく日々を憂い、一九四四（昭和一九）年一〇月、教官たちによる志願特攻隊を編成してフィリピン方面に飛び立った。しかし待ち構えていた米空軍によってレイテ島バイバイ近海で撃墜された。奇跡的に生還した同僚の話に

よれば、当時の戦闘機はベニヤ板の胴体で米軍機の機銃掃射によって機体も優の体にも銃弾が貫通し、翼を左右に振りながら（同僚への別れの挨拶）海中に没したとのことであった。享年三三歳。

（道子さん）

道子の父、上田達雄は一九二一（明治四四）年に熊本県人吉市で生まれた。

京都大学を卒業後、満州の「満蒙毛織」に就職。その後、母ひろ子と満州に渡り三人の子をもうけて幸せな日々を送っていた。なにしろ広大な大陸ゆえ毎年起こる黄河大氾濫には半年も前からその兆候があり、父はその都度奔走して会社を守ったという。

住まいの社宅には三人の中国人のお手伝いさんがいたが、口癖のように「日本戦争負ける。中国勝つ！」と妻のひろ子に言ったという。

事態は一変する。一九四四（昭和一九）年、日本の敗色が濃くなると父に現地応召の赤紙がくる。それまで様子をうかがっていたソ連が参戦して北方より攻め込んでくるという専ら噂がとぶ。さらには満州に展開して民間人を守護していたはずの関東軍が一夜のうちに姿を消してしまふ。

最悪の事態と判断した達雄は「お前たちは一刻も早くここを脱出して日本に戻れ！」とひろ子に言い置いて己の身を北に向かわせた。一九四四（昭和一九）年のことだった。生還した人の話では一九四五（昭和二〇）年八月、なだれ込んできたソ連軍の機銃掃射によって日本の残留兵と民間人たちは皆殺しになったという。享年三五歳。

（2）克敏さん、道子さんのお母様の生年月はいつですか。お母様が結婚され、克敏、道子さんを生んだ当時のお母さんのことについて、お聞かせください。またおふたりのお母様の戦後の生活、「苦労についてお聞かせください。」

（克敏さん）

克敏の母、田端節子は一九一八（大正七）年二月に熊本県人吉市に生まれた。

節子は昭和一五年に優と結婚して、二児（男児）をもうけた。しかし優は各地の飛行場を転々として若いパイロットの養成にあわただしく、わずか四年足らずの新婚生活を温める暇もなかったという。

節子は二人の息子を連れて節子の父母（わけあって母の養父母であった）の元に身を寄せた。父の戦死の報もその養父母の下で受けた。

戦後は二人の息子の養育に加えて、養父母の世話に苦心する日々であった。人の世話で市役所の非常勤の仕事を得たが、その働きぶりは常勤の職員を凌ぐほどだったという。しかしその薄給では一家五人の口を糊するにはあまりに少ない収入であった。

（道子さん）

道子の母、上田品枝（後にひろ子に改名）は一九一八（大正七）年二月に岐阜県萩原市で生まれた。

ひろ子は達雄と結婚して満州に渡る。二男一女に恵まれ八年ほどは幸せな時を過ごす。

しかし戦火は日本の劣勢となり、達雄は急遽母子四人の帰国の段取りを組んだ。まだいくらか余裕がある時期、達雄の同僚だった女性が母子四人の逃避行に連れ添ってくれ、無事に舞鶴の地を踏んだのは敗戦一年前のことだった。

その時期はまだ荷物も多く持つて帰ることができたというのが常にお金には不自由した。達雄のもしやの生還を願って、達雄が大車にしていた外国製の高級カメラや持ち物を手放さなかったという。

ひろ子は達雄の郷里の縁者たちの温かい庇護のもと、ポーラ化粧品販売の仕事を得、やがて支店を構え大勢のセールス員を抱えるまでになった。

日中国交回復後初めて中国残留孤児が帰国し「私のお母さん会いに来て！」とテレビで呼びかける彼らの悲痛な叫びに母は泣きくずれた。そして「ゴメンゴメン！」と涙を流し、また一方で遺された子たちを拾い上げ育て上げた中国の親たちに手を合わせ、頭を垂れて感謝した。

③敗戦前、お母さんと道子さん「兄妹は満州から引き揚げられたのですか。お母さんに聞いておられることがありましたら、お願いします。(この項は道子さんのみ)

「胡蘆島への道」(道子さん)

幸い私たち母子は父の適切な判断によって、終戦の前に満州から帰国できたが、終戦時、満州には一六〇万人近い日本人が残された。関東軍は日本の民間人を置き去りにして引き揚げたという

ことになる。それもソ連の侵攻を食い止めるためという理由で主要道路の橋などを壊しながら引き揚げて行ったという。

ソ連侵攻の満州で父の会社の社長一家はソ連軍に惨殺されている。ソ連軍は日本人の工場機械、備品、材料など全てを本国に持ち去ち去り、中国共産党がたどりついたときには主要なものほとんどなかったという。

その上、ソ連は日本人捕虜六万人をシベリアに抑留し、戦争終結後何年も強制労働をさせたのである。

勝てば官軍というが、終戦ぎりぎりに参戦し戦勝国となったソ連のやり方はあまりにひどい。戦争とはもともとそういうものなのであろうか。

さて終戦時、残された日本人であるが、日本政府は満州定着と決めた。これもひどい話である。荒野となった満州で日本人は勝手に生きて行ってくれというわけである。

最も、私の父母をはじめ、国の政策を信じて他国である満州に夢を抱いて渡った日本人にも全く責任がないとは言えないと私は思う。

テレビのNHKスペシャルで「一〇五万人の日本人送還・胡蘆島への道」という番組を見た。戦後、蒋介石率いる国民党は南に配置している国民党軍兵士を満州に輸送するために、輸送用の船舶の援助をアメリカに依頼していた。そこでアメリカは日本人送還



満州引揚 (田端道子・画)

と国民軍兵士輸送を組み合わせた「人間輸送プロジェクト」をたちあげた。

帰国のための港は大連を使うはずであったがソ連に占領されていたため、遼寧省の葫蘆島になったという。日本人送還は一九四六年五月からはじまり一九四八年八月に終了し、一〇五万一〇四七人が帰国している。葫蘆島の港には今も送還された日本人の送還記念碑があるという。(二〇〇九年一月)

*葫蘆島については、「反天皇制市民一七〇〇」(第五五号)の拙稿「靖国神社遺児参拝 戦後と戦前の連続六」参照

ふたりで海外に翔ける日本語教育ボランティア

田端克敏・道子さんに東京でお会いした時におふたりで海外の日本語教育ボランティアに携われた時の記録(冊子)をいただきたい。克敏さんは東京都立高校で国語・書道の教員だった時、東京都から山東大学に派遣され(一九九〇年)、日本語教師を勤めた。二人は五五歳でそれぞれの職を早期退職し、中国・タジキスタン・ロシア等海外八大学で足かけ一二年にわたり日本語教育のボランティアの活動に従事した。その間の『滞在記』(自家版)を五冊作っている。そのうちのタジキスタンの『田端克敏・道子のタジキスタン滞在記』(三恵社、文・田端克敏、パソコン水彩画・田端道子)が出版された。二人の滞在記は実に生き生きとしていて、(大変な苦労があったにもかかわらず)愉快で楽しい。「何が愉快だったか、それは未知の諸外国に私たちは一切の予見・偏見なしにす

んなり飛び込んでいくことができたということに尽きる。私たちはそれらの諸国の長い歴史に裏付けられた文化や気品といったものを愛し楽しんだ。」(第二刷の「あとがき」)

克敏さん、道子さんは足かけ一二年に亘って海外での日本語教育のボランティア活動に従事されましたが、それぞれの時期の派遣先を整理ください。(克敏さんの単身での赴任はいつの時期でしたか)また海外での日本語教育にかけようとされた動機は何ですか。さらにその一二年間を振りかえり、克敏さん、道子さんにはどのような意味、意義がありましたか。

(克敏さん)

一九九〇年九月、現職のまま東京都から山東省済南市の山東大学に派遣された。中国全土からめられた「日本語教育」に従事する若手教師をレベルアップするのが私の任務だった。その頃は中国に日本語の勉強熱が高まっていて、若い工員たちが仕事帰りに小学校の教室を借りて勉強する光景が散見された。指導者もテキストもなく、ひたすら手書きの手帳を読みあっているさまに私は心打たれた。あの戦争で日本が蹂躪した中国に少しでもお返しすることができるのはこれだと強く思った。

同居していた母が一九九六年に亡くなった。妻の道子は五年以上続いた母の看病と一〇年ほどの障碍者施設の勤務とで身も心も疲れ果てていた。このままでは病む。よし、今が潮時。中国での「日本語教育」(ボランティア)に出よう。克敏も道子も一九九七年三月、五五歳で早期退職を決意した。三人の子どもたちはまだ一人前というには程遠かったが彼らの生まれ持った力に託そうと

思った。たまたまの縁で中国・北京の「外交学院」から夫婦で来てほしいという要請があつて私たちは一九九七年九月に北京に降り立った。以来北京第二外国语学院、厦門大学、北京理工大学を歴任して七年がたった。私たちはいずれの大学でも教室でのレクチャーにとどまらず、学生たちに日本文化を体験させ宿舎に呼んで料理をふるまい歓談した。学生たちは大変喜んでくれた。しかし一方では戸惑つてもいた。中国人学生たちの高校までの教育では、日本は悪の権化で日本人は血も涙もない冷血漢とされていた。「先生たちご夫妻に接するたびに何を信じたらいいのかわからなくなるのです」学生たちも戸惑つていたのである。

私のもう一つの専門は書道であつた。その本場中国でまた多くの秀抜たる人材にも触れ歓談できたことは大きな収穫だつた。書画を通して語りあうことに言葉の壁はなかつた。

(道子さん)

中国・張家口生まれであつたこと、また、父が満州北部で無念の死を遂げたことからチャンスがあれば中国に行つて、住んでみたいという願望を若い時分から持ち続けていた。また大陸生まれの私には、国籍や人種、また言葉や習慣の違いをもともしない気が培われていたようで、中国に限らず、タジキスタンのドウシヤンベ、ロシアのマガダンに住んだ時にも全く違和感なしに交流できた。さらに私は幼少より絵画が好きだつたため、海外のどんな風物にも新鮮な感動を覚えて飽きることがなかつた。思い返せば一二年に亘る海外生活に付きまといがちな困難や苦しさといったものとは無縁であつたように思う。

「風のまにまに」(克敏さん)

この十余年の私の大陸遍歴は、今から思えば新しい風を求めて放浪し続けたといつてもいい。

北京では楊樹の花綿を撒く風であつた。古くはその花綿を「柳絮」と呼び風流人士はそれを愛でて酒を汲み詩をものした。

私はこの柳絮の舞うころの北京が一番好きで、飽くことなく眺めたものだつた。吹雪のように流れて止まぬ柳絮の中に立ち尽くすのもいいが、明けやらぬ窓辺をすつと音もなく過ぎる柳絮の一片が望郷の念をそそつてもの哀しかった。

しかし北京はこの十余年激しく様変わりした。旧都の象徴である胡同もそこに建つ四合院もすべて叩き壊され、そこに改めて建つたのが高層マンションである。近代的住宅を手にした人々は、かつて胡同に流れる風のそよぎに運ばれて歴史の匂いが漂い、そこにたむろする人々の談笑が溢れていたものだったが、いまやそれらは全てない。

洛南には街路樹や大学の構内を彩るものとしてプラタナスがあつた。この木が、早春の風に誘われて地下根から汲み上げた大量の水をこぼし始めるとやがて芽出しの季節である。枯れたようにたたずんで幹のあちこちからニョキニョキと芽が現れ、たちまちにして浅い緑の大葉が上空に手を伸ばしていく。まさに大地の摂理を謳歌するさまである。

また、冬の寒風はすずかけの巨木に生る実を打ち鳴らした。ひとしきりすずかけの実が鳴り終えると今度はさらに粉雪が刷いた。そうやって冬は確実に訪れた。

南国アモイの風は一年を通して湿っぽく、身にまとわりつくも

のがあったが、それは決して不愉快でなかった。その風に乗って、時期を選んでさまざまな花が咲いた。

大振りで椿に似た木綿花は二〇メートルもの大木の枝先に咲いた。まだ彩りの乏しい季節に真っ赤な花だけが枝びつしりと埋め尽くす様は幻想的すらある。その花が遙かな高見からまるで落下傘のようにくるくると舞ながら落ちてくると、子どもは先を争って拾い集めた。

鳳凰花はさらに豪華だった。これが中国の卒業にあたる六月と入学にあたる九月に咲くというのものなんとも不思議な花である。三月にはデイゴの花が咲き、四季を厭わずブーゲンビレアが風に揺れた。

ダジキスタン・ドウシヤンベでは、長く厳しい冬が去る三月、いきなり春風が立ってそれまで寒々としていた雪山がいきなり緑の草に覆われる。その季節を待ちかねて人々は争って山に向かい、草地に寝そべって匂いを嗅ぎ、羊を葬って焙り、日がな一日踊りまくる。

風は高原都市を年中吹き抜けた。その風はポプラの高い梢を豪快に、また時に優しく揺すり続け、私たちはその隙に雪空や青空を見、満月を見た。

ロシア・マガダンは一年の大半を暴風雨が襲った。一度吹き出した風は勢いを増して一週間も十日も止むことなく、あまりの風の強さに降った雪が剥ぎ取られてあちこちに吹き溜まった。私はその暴風雨の中を、重い外套とブーツを身につけよるよると歩いた。わずか先の大学までの歩行で何度も足を掬われて転び、剥き出しの顔が寒さで痛んだ。

そんな日の合間、ぱたりと風が止みふわりと北極の月が出た。

ここでは、月も太陽も中天に昇ることなく、東の山の端を舐めるように辿って真南のオホーツク海に落ちた。

六月になるとさしもの暴風雨が癒えて、いつせいに草木の芽吹きが始まる。落葉松は浅い緑の柔らかい芽に覆われ、地面を這うようにして苔桃の花が咲いた。まだ肌寒いが爽やかな初夏の風に靡いて輝いていた。

そして今、私はそれらの風を懐かしみながら日本の晩秋の風を受けている。これからの私の余生にまた新しい風は吹くだろうか。まだまだ遍歴は続いているようである。

(二〇一一年晩秋)

おわりに

今回の田端克敏・道子さんの聞き取りを終えて、これまでの「靖国遺児参拝 戦後と戦前の連続」という私のテーマへの視点に大きな転換を迎えたと感じている。連載の数回前から私の視点が変わってきた。北海道の木村崇さん(第五三号)では、戦争体験・靖国参拝をベースにした私と同世代の体験から「ロシア文学との出会いと探求」へ、宮武正明さん(第五五号)では、「中国残留孤児・婦人二世三世への教育支援活動」へ、今回の田端克敏・道子さんでは「海外の日本語教育ボランティア」へと戦後に形成・成長されてきた過程が見えてきた。また、父親の戦死と戦後の家族の苦労は戦没者の遺児の戦争体験の原点となるが、靖国集団参拝体験はかならずしもそうはならない。今回の田端さんたちにとっては「苦痛の体験」であったし、私の場合は今もついてまわる「負

の体験」であった。同世代においてもはつきりとした記憶に残らなかった人もいる。そのことから、私は「靖国集団参拝」は同世代の戦没者遺児にとって、避けては通れない「通過儀礼」ではあったが、それ以上でも以下でもなかったと思うようになった。今後は同世代の体験者に次のことを聞き取って行きたいと思う。同世代の靖国遺児参拝体験者が、靖国参拝の後によろしく自己形成を遂げ、戦後をどのように生きてきたのか。戦後を生きる核に何を据えてきたか。このような関心をもとに、次の課題を追いかけて行きたい。

(一)私は一年前からズームによる「読書会」に参加していて、最近、大阪府の同世代の集団参拝体験者と出会い、当時の体験を聞くことができた。さらに拙著『靖国を問う』の出版社経由で京都平和遺族会から講演依頼があり、七月末に話をさせてもらう。同世代の体験者と新たな出会いが続く。

(二)今回の田端さんたちが体験した熊本県の靖国集団参拝については、熊本日日新聞に戦前と戦後に両方の体験者取材した記事が掲載されていた。(一部分今回に紹介した。)今秋、取材のため熊本に出かける。

〈訃報〉

本誌で第五号で紹介した甲斐国三郎さんがお亡くなりになったとの訃報を、私の友人で、甲斐さんの甥にあたる一色若夫さんからいただいた。甲斐さんの死に対してお悔やみを申し上げます。

「叔父は戦後、東京で運転手をしていた時、仕事先（中華民国駐

日代表団何世礼氏宅）で香都さん（叔母）と奇跡的な出会いをした。叔父がコロ島で帰還業務をしていた時、面談をしたのが彼女である。同じ熊本県出身で親近感を持っていたようだ。『家庭を放っていた』と従姉妹は言うが、叔母が脳梗塞で倒れ、言葉を失い、不自由な身体になってから二十年余り、献身的に介護していたようだ。二〇二二年九月、叔父も望んで郷里の施設に移ったが、昨年一二月に九七歳で生涯を終えた。今、私は叔父・叔母の思いの一端を受け継ぐ気持ちでいる。」（一色若夫）



くつろぎの時